

臆病者の文章表現

——表現法の試み(四)——

中 森 康 之

はじめに

以前「表現法の試み」と題した一連の論考を^(注1)発表した。本稿はその続編である。参考までにこれまでの目次をあげておく。

目 次

人間関係をつくる自己表現

はじめに

第一回 文章を書くということ

第二回 なんて？

第二回補足

自分を開く文章表現

第三回 楽ちんなのだ

第四回 もじもじしないの

自分を生かす文章表現

第五回 バカにされるのやだ

第六回 私がねじれるとき

その後、勤務先を移った。そのためこれまでは、短期大学部二年生(商経科)の学生を対象とした授業をもとにしてきたが、本稿は工学部の三年生(主として高専出身者)を対象とした授業をもとにしたものである。文科系の短大生、ほとんどが女子。高専出身の工学部生、ほとんどが男子。非常に性格の異なる学生を相手にして、私は同じ授業をしている。と、最近になってようやく言えるようになった。文系であろうが、理系であろうが、短大生であろうが大学生であろうが、もちろん男であろうと女であろうと、誰にとつても、文章を書くということの一番大事な点は同じなのだということが、ようやく確信できるところになったからだ。

そのようなこともあって、前回の論考からだいぶ時間がたつてしまった。掲載誌も変わった。そこで、まずは私の「表現法の試み」が如何なるものかを説明した上で、前稿までの内容に簡単に触れながら本題に入ることにしたい。なお、前稿までと同様、学生も読むことを前提としているので、現在の私にとって無理のない範囲で、文体もできただけ踏襲した。

・臆病者流

僕は臆病者だ。いつも自分に自信がなく、傷つくことを恐れている。けれど、人に自分のことを分かってほしいと思っているし、人のこともよく分かりたいと思っている。ただ日常生活では、それがなかなかうまくできない。間合いがうまくとれないのである。

また僕は、自分で自分のことがよく分からない。自分が普段何をどう感じ、考えてるのかも、実は自分ではあんまりよく分かっていない。だからよく「あなたはたは本当に昨日のあなたと同一人物なの？」と妻にも心配される。学生に「この前と言ってることが違いますけど……」と怒られることもある。しかし僕は何もデタラメを言ってる訳ではないのだ。それどころか、そのとき、そのときで、本当に誠実に考え、一番いいと感じたことを口に出しているのである（もちろんそんな言い訳が通用するはずもないし、自分でもちよつと自信がなかったりもするけど）。

そんなこんなで、普段の僕は、確固とした自己を持ち、自信をもつて意見を述べ、他者とうまくコミュニケーションをとる、ということができない。いつも、他者との間合いを測りかね、自分がどこかばらばらだと感じられて仕方ないのである。

でもそんな僕でも、唯一、自分が一つになれると感じられるときがある。自分が何を感じ、考えていたかが、自分ではつきりと受け取れるときがある。文章を書いているときだ。さらにその文章が誰かに深く受け止められたと実感できたときは、ほんとうに嬉しい。

僕にとって文章を書く作業は、ジグソーパズルに似ている。ばらばらになっっている自分自身を、一ピース、一ピース試行錯誤しながら組

み合わせてゆくのである。だから僕は文章を書くのものすごく時間がかかる。何度も何度も立ち止まり、自分に問いかけ、自分が本当は何が書きたいのかがはつきり浮かび上がってくるまで書き直さなければならぬからだ。

でもこれが、結構楽しいのである。逆にも僕が文章をスラスラ書けるような人間だったら、初めから文章なんて書きたいと思わなかったかもしれない。

ところで、実は長い間、これは僕の欠陥だと思っていた。この欠陥を克服しなければ、いい文章が書けないと思っていたのだ。しかし案外そうでないかもしれない。それを教えてくれたのはTさんである。

僕も執筆した本（竹田青嗣・西研編『はじめての哲学史』有斐閣 平成十年）の編者と知り合いだったTさんは僕の文章を読んで、「未完成の魅力」と評してくれたらしい。それを聞いたとき、ああ、やっぱり自分は文章が下手くそなんだと少し落ち込んだ。でもその意味が、次のようなものだったと伝え聞いたときは、ほんと嬉しかった。

未完成で、自信がなくてゆれていて、そういう自分を見つめながら書いてらっしゃるから、わたしみたいな人間にすごく響く。自分にひきよせて、考える空間みたいなのを与えてくれる。この方、ご自身のコンプレックスや短所を、ぜんぶ持ち味に作りかえてる。

恥ずかしい。でもそうだったのだ。もともと僕は正しいことが言いたかったのでもないし、立派なことを人に教えてあげようとしていた

のでもなかったのだ。僕はただ、自分がしばしば戸惑いながら、どのように考えたかを他人に上手く届けたかっただけなのだ。それが僕の文章だった。内容も文体も、立派である必要なんてない。大切なことはもつと他にある。そのことをTさんは教えてくれたのである。

臆病者には臆病者の流儀がある。臆病者にだって文章を書くことができるはずだ。いやむしろ、臆病者にしか書けない文章もあるのではないか。

「表現法の試み」とは、もし臆病者が、臆病者のままでいい文章が書けるとすれば、そもそも人が文章を書くとはどういう行為なのか。それにはどんな意味があるのか。また、そのとき、「いい文章」「悪い文章」とはどういうものなのか。そして、「いい文章」を書くには具体的にどうすればいいのか、を考えようとするものである。

以上が「表現法の試み」の出発点である。次に、各回の内容を簡単に復習したい。

・これまでの復習

そもそも僕がこの「表現法の試み」を始めた動機は、自分で文章を苦手だと思い込んでいる人が多く、そのほとんどは、文章を書くということをひどく誤解していると感じたからである。その誤解を解いて、文章を書くということのほんとうの意味を知ってほしい、文章表現の醍醐味を味わってほしいというのが僕の願いだ。それを第一回「文章を書くということ」で説明した。

文章を書くのが苦手な理由を聞いてみると、多くの人が、正しい書き方が分からない、という。そこで僕は、まず初めに力説した。文章

に正しい書き方などない。あるのは、「いい文章」とそうでない文章だけだ。だいたい、僕を含め、みんな、今までに「正しい文章の書き方」なんて習ったことがないはずだ。そんなもの、もともとないのである。なのにごどこかで「文章を正しく」書かなければならないという脅迫観念に怯え続けている。こんなバカな話はないだろう。まずは脅迫観念から自由になること。

さて、まずこのことをはつきりさせた上で、文章表現の意味と「いい文章」について、一から考え直すという作業を進めてきた。

僕の考えでは、文章を書くとは、自分と他人に対して自分自身を深く了解させる試みである。だから、自分がちよつと何か書いてみたい、そう思ったときに、変な抵抗感を持つことなく気軽に文章が書ける、このことが非常に大事なのである。そして、何かまじめに考えたい、少し自分を見つめたい、自分の考えを誰かに分かってほしい。そのことに含まれる難しさや楽しさが、文章を書く醍醐味なのである。

だから、自分自身を深く受け止め、他者から深く受け止められたと実感できる、そんな文章こそが、いい文章であると思う。もしそうでないなら、少なくとも僕には文章を書く意味なんてない。

ところで、文章表現の意味をこのように考えると、文章を正しく書かなければならないという脅迫観念こそが、逆に文章の力を奪っていることが分かってくる。それだけではない。いつもそんな風に文章を書いていると、自分の中で、自分や他者に対する信頼感が壊れ、言葉に対する信頼感が壊れてしまうのだ。そして、文章を書くということがひどく虚しい経験でしかなくなってしまうのである。第三回「楽ちんなのだ」では、実例を挙げながらそれを説明した。

順序が逆になつたけど、第二回「なんで？」の目玉は「いい感想文の書き方」。僕もそうだったけど、小学校以来ほとんどの人が悩まされ続け、それでいて、一度もきちんと習ったことがないものだ。日本の学校というところはおかしな所で、感想文をやたら書かせるくせに、よい感想文の書き方をきちんと指導しない。結構走らせるくせに、「百メートルの正しい走り方」なんてのを全然教えない。ほんとうになつてゐるんだらう。まあ、それはともかく、大前提は「感想自体にいい悪いはない。しかし感想文にはいいものと悪いものがある」。

第四回「もじもじしないの」は、文章の書き出しはどういうものかいいのかわ、具体例をあげながら考えたものだ。

第五回「バカにされるのやだ」、第六回「私がねじれるとき」では、脅迫観念を捨てて、いざ自由に文章を書こうとすると感じてしまう不安について考えた。

自分の書きたいことを書きたいように書こうとすると、誰でも、これって他人にどう思われるんだらう……

こんな事書いてバカにされないだらうか……

という声が聞こえてくる。この声に負けて、当たり障りのない文章を書けばそこで終わり。その不安を乗り越えて書かれた文章だけが、自分を深く受け止め、かつ人に深く受け止められる可能性を持つ。その意味で、文章を書くという行為は、自分自身の存在を脅かす不安の声を乗り越える試みそのものなのである。そしてこの不安を乗り越える難しさと楽しさこそが、文章表現の醍醐味である。

大体、以上のようなことをこれまで考えてきた。詳しくはそれぞれの回をご覧下さい。

さて、ようやく調子も出てきたので、そろそろ本題に入るとしよう。

四

第七回 ミスターX

・なぜかドキドキ

文章を正しく書かなければならないという強迫観念を捨て、書きたいことを書きたいように文章を書こうとすると、必ず不安の声が聞こえてくる。

これって他人にどう思われるんだらう……

こんな事書いてバカにされないだらうか……

そもそも、人が何かを自由にやろうとすれば、必ず不安を伴うものだ。自由であることの喜びは、その不安と引き換えに得られるといつてもいい。ただ文章を書くときの不安は、これとはちよつと違うところがある。文章表現における不安は、人間関係のあり方そのものを根拠としているからだ。

「人間関係とは何か」。まずはじめの答えは、人間関係は自己価値をめぐる相互的な承認ゲームだ、というものです。(略)

要するに、さまざまなルールの束があり、またそのゲームの大きな諸目標がある。それらのルールにのつとつて、各人は諸目標をめがけて行動します。そして、この成果によって評価され、この評価に応じて社会的な報酬を得るのです。

人間関係とは、まず、こうした社会的な承認ゲームです。大臣や社長や作家が偉いのは、彼らが承認ゲームで成功してい

るということです。(竹田青嗣『愚か者の哲学』主婦の友社 平成十六年九月)

なるほど。でも、僕たちにとって重要なのはその次である。

しかし、もう一つの側面があります。この社会的承認ゲームの中で私たちはさまざまな「他者」たちと出会います。そして彼らと人間的に親しくなります。これは社会的な承認ゲームの場面とはまたちがつた具体的な「人間関係」の場面です。具体的な「人間関係」で起こっていることは何でしょうか。

私たちはここで、具体的な他者たちと関係します。そのとき、私たちはそれぞれの「自己ルール」をもった人間として向き合います。自己ルールとは「真・美・善」についての内面的ルールですから、みな少しずつ違います。要するに、価値観、信条、感受性、美意識などは各人各様です。具体的な人間関係の中で、人は、互いのルールの食い違いに気づきます。(略)このとき人々は、それぞれの自己ルールを交換しあい、そのことを通して、他者たちと人間としてつきあっている。各人が個性をもった人間として出会うというのはそういうことです。

つまり、具体的な人間関係は、各自が一定の立場をもって競いあう「承認ゲーム」それ自身ではなく、この承認ゲームを通して私たちが個性をもった人間として関係しあい、了解しあう、相互的な「了解ゲーム」なのです。(同)

自分と他者との関係が、相互的な「了解ゲーム」だということは、どこかに「正しい」基準があるわけではない、ということだ。正しいかどうかの問題ではなく、あくまで僕たちは他者によって絶えず自分を評価される存在、認められることもあれば、場合によっては否定されることもある存在だということである。もちろんそれはお互い様。僕たちはそういう関係を生きているのだ。

だから人生の希望も絶望も、喜びも悲しみも、ここから来る。

私たちの生の意味は人間関係のエロスから生じてくるので、ほかに出どころがない。そして人間関係とは、希望と苦悩、喜びと悲しみのあざなわれた縄であって、……(同)

うーん、うまいこと言いますね、竹田さん。確かにその通りで、「自分で自分を褒めてあげたい」という言葉が流行ったことあつたけど、いくら「自分は偉い」「自分は正しい」と自分だけで思っている、誰もそれを認めてくれなければ、ほんとうには喜べないものだ。まあ、「みんな自分のことを分かっている。バカばかりだ」というルサンチマン人間になって、自分を慰めるしかない。そんな風に生きてて楽しいはずがない。逆にほんとうに認められたと確信できたときは、とても嬉しいものだ。

他者はいつでも、自分自身についての、深い喜びと悲しみの源泉なのである。

もちろん僕たちは、普段いつでもそれを強く意識している訳ではない。そんなことしてたら疲れて仕方ない。でも、自分の言いたいこと

を書きたいように書くとうるとき、僕たちはこのことを強く意識せざるを得ないのである。なぜなら、自由に文章を書くとうすればするほど、自分自身はその文章に強く現れるという感覚も強くなるし、それを深く理解してもらいたいという気持ちも強くなるからだ。

もちろん文章が批判されたからといって、それを書いた人自身が批判される訳ではない。文章によって別の人格を作り上げることも可能である。しかし、そのことを含んだ上で、それでもなお、文章が必ず誰かに向かって書かれる以上、それを読んだ人が自分の文章をどう受け取ったのかを気にせざるを得ないのである。

しかも困ったことに、この他者というもの、絶対自分の思い通りにはならないし、絶えず予想を裏切る可能性を秘めているのである。他者はいつでも謎の存在、ミスターXなのだ。そうである以上、自分の文章が深く受け止められるか、誤解されるか。褒められるかけなされるか。あるいは無視されるか。絶対の予想は不可能、全ては他者から実際に反応が返ってくるまで分からないのである。不安になって当然だ。

あるいは中には、全く不安にならない人もいるのかもしれない。でもそんな人には、もともとこの「表現法の試み」は必要ないし、僕はそんなツワモノ、ほとんどいないんじゃないかと思っている。その証拠に、僕はこの授業を何年もやってきたけど、自分の文章が授業で採り上げられたとき、みんな例外なくドキドキしているのだ。

自分の文章を読まれ、人に意見される中で、恥ずかしかったり、ほめられてうれしかったり、訂正されて納得したり、結構

考えていたより楽しかったです。シラバスに書いていたドキドキするとう事が少し分かった気がします。(感想文)

「授業中ドキドキする」。これを僕は授業の最大テーマとして掲げて(注)いる。実は、このドキドキこそ、文章を書くとうことの本質を解く重要な鍵なのである。

もし文章を書くとうことが、正しく書くことを目標とするのであれば、そしてその「正しい」がはつきり存在するのであれば、このようなドキドキは決して味わうことが出来ない。多少ドキドキするかもしれないけど、大したことはない。正解があれば、自分の出来はだいたい予想できるからだ。言ってみれば、数学のテストを返してもらおう程度のドキドキである(ん? 結構ドキドキするって?)。

でも、文章表現のドキドキはこれとは全く質が違う。その証拠に、二回目、三回目の課題文へと授業が進むにつれて、このドキドキの質が変化してくるのだ。第一回目の課題は、正しく文章を書かなければならないという強迫観念を強く持つて書かれたものが多い。だから「間違つてないか」というドキドキが強い。それに対して、その脅迫観念から自由になり、書きたいことを書きたいように自由に文章が書けるようになってくると、全く質の違うドキドキがやってくるのだ。これこそ、「了解ゲーム」である人間関係の本質を基礎とした文章表現の本質からくるドキドキなのである。

まず初めに、一学期の間お世話になりました。そして次に、本当に「ドキドキしました」。

日本語法Cの授業の中で初めて「確実に誰かに読んでもらうことを前提として文章を書く」という経験をされたのですが、本当に楽しい思いをさせて頂きました。特に、2回目の課題だった「私って」という主題での文章を書いた時のこと。非常に思い入れを込めて書いた文章だっただけに愛着が湧き、自分の文章がなかなか授業で採り上げられないことに対して、悶々とした思いを抱きながら時計とにらめっこをしていたものでした。

自分が創造したものを誰かに評価してもらおうということは、大変に嬉しいものですが、それを経験できる機会は、人生の中でもなかなか無いように思います。私が、本教科を通して幸運にもその喜びを知ることができた事は、私の人生の財産となるでしょう。また経験したいものです。(感想文)

ここで彼が知りたいのは、自分の文章が正しいか間違っているかではない。自分の文章が、他者にどのように受け止められるか、ということなのである。こういう感想を書いてくる彼は、文章表現において、間違いなく、自己と他者との「了解ゲーム」に我が身を曝している。そこから、文章を書くことの喜びも悲しみも得ているのである。

自分らしく文章を書くこうとして不安になる。その文章が授業で採り上げられてドキドキする。この不安とドキドキこそが、文章表現の目的が「正しい」ではなく、他者に「深く受け止められる」にあることの証拠なのである。そして僕が、「自分と他人に対して自分自身を深く了解させる試み」が文章表現の本質だという理由である。

自由に文章を書くこうするとき聞こえてくる不安。これは、人間関

係の本質、文章表現の本質から聞こえてくる声である。そうである以上、この不安を避けて文章を書くことは出来ないのだ。

・私は正しい

この不安の声、絶対避けられないとなると、一体どうすればいいか。

まずここで絶対やってはいけないことがある。既に第五回「バカにされるのやだ」で言ったけど、この声に負けて、当たり障りのない文章を書くことである。当たり障りのない文章とは、一言で言ってしまうと、批判されることを恐れるあまり、深く受け止められる可能性を捨てた文章である。誰かに分かってほしいという希望を捨てた文章が、他人に深く受け止められることなどあり得ない。それだけではない。恐ろしいのは、こんな文章ばかり書いていると、自分や他者に対する信頼感が壊れてしまう。そして、言葉に対する信頼感が壊れ、文章を書くという行為がひどく虚しい経験になってしまうのだ。絶対やっちゃダメ。

もう一つ、ついみんながやってしまうことがある。正論を述べるということである。誰が聞いても正しいと思うこと、誰からも批判されにくいことを書くこうとするのだ。これも絶対やっちゃダメ。

一つ例を見てみよう。

『おはよう』 元気な挨拶 ところが踊る。

小学校のときに書いた標語です。このころは挨拶をしようとしたのではなく、自然にしていました。でも大きくなるにつれ

て意識しないと出来なくなってきたし、小さいころよりもつと挨拶が大事になつてきた気がします。

第一に挨拶とは礼儀です。新しいバイト先に行くたび挨拶を基準にしてその場の雰囲気や働いている人について見ることにしています。やつぱり上下抜きにしても、朝来た時や夜帰る時に挨拶ができない人間というのは仕事もきつちりできないし、挨拶が少ないようなバイト先は場の雰囲気が悪いものでした。接客だったのでそれが際立ったのですが、やはり人としての礼儀を欠いた人間は何もできないものです。

次に挨拶は人と人の心を繋ぐ潤滑油でもあります。(略)

途中までだけど、どうだろう。心つかまれそうかな？ ここで述べられていることは、例えば「老人には席を譲りましょう」というのと同じで、いわゆる正論である。別に間違つたことは書いてないし、挨拶が大切だということ自体を批判する人もいないだろう。でも、「なるほど！」と思つた人いる？ 心をつかまれないよね。

実はよほど観念的な人間でない限り、一般論として述べられた正論に心をつかまれるなどということはありえないのだ。どうしてかという、そんなこと誰にでも言えるからだ。

小林秀雄が面白いことを言っている。年齢と思想の関係について述べている中で、小林は、

どうして年をとつたならば、年をとらなければ分からないようなことを考えないか。(略) こういうふうな考えが今日軽蔑さ

れているのは、何でしょうね。これを合理的思想というんです。合理的思想というものに年がありますか？ ないんだよ。子供でも二に二を足せば四なんです。老人でも四なんです。だから正しいことは老人にとつても正しいんです。青年にとつても正しいんです。これが真理なんです。正しいことなんです。だから年齢というものを考えない。(略) だからいつまでたつても、老人になつても実に若々しいということが誉められますね。それもまあ、一理はあるだろうが、ひるがえつて考えるところな馬鹿馬鹿しいことはありませんね。じゃあ、年をとつた甲斐がないじゃないか。いつまでたつても青年らしい奴なんて。何のために年をとつたんですか。

(小林秀雄講演【第四巻】『現代思想について』新潮社)

と述べている。僕はこれを聞いたとき、とても楽になったことを覚えている。そしてさらに次の言葉を聞いたとき、ちよつとショックを受けた。

正しいことなんてあんまり大したことじゃないね。正しいことなんて子供でもいえる。私はそれくらいに思つてます。(同)

僕も、正しいことを言わなくちゃいけないという強迫観念を持っていたのだろう。そういえば課題文の冒頭にも「小学校のときに書いた標語です」とあつた。

小林の言葉を臆病者流に言い換えるところなる。

もちろん正しいことを書いてはいけないということではない。でも、その「正しい」ことを彼が書くのには、それなりの理由があったはずなのだ。課題文にこのテーマを選んだということには、彼なりの固有の動機があつたはずなのである。今の自分にとって一番大事なことがそこにあるのなら、なぜそれを表現しようとしなのか。せつかく文章をかく甲斐がないじゃないか。

ではこの課題文、どうすればよかつたのか。もちろんヒントは文中にある。第一段落はそのまままどいくとして、僕の見るところ、第二段落で別の道があつたように思う。例えば「なぜ、小学生の頃は、自然と出来たのに、大きくなるにつれて出来なくなつてきたのか」と問うこともできた。そうすれば、今の自分の問題として、自分の経験として、挨拶というものを考えられたはずである。そして、今、なぜ挨拶について考えることが自分にとって意味があるのかも、自分自身にはつきりと納得させることが出来るはずだ。案の定、彼自身、授業後の感想文にこう書いてきた。

テーマをあいさつに決めたのは、バイト先であいさつが行われていなかつたためです。

ちゃんと彼なりの動機があつたのである。もし彼が、なぜ今自分は挨拶が大切だと考えるのか、バイト先ではなぜ挨拶が行われていないのか、またなぜそれに自分は違和感を持つのか、ということをも自分自身に問いかけていたら、全く違つた文章となつていたに違いない。

・自分の文章ということ

どんな些細なことであれ、それをその人が主張するには、その底に、必ずその人固有の動機、必然性がある。僕は文章を読むときに、いつでもそれを読み取ろうとしていた。僕だけじゃないはずだ。誰でも文章を読むとき、何も字面だけを読んでいく訳ではない。その字面を通して、その文章が一体何を表現したがつていくのかを、必ず読もうとしているのだ。それをうまく受け取れたとき、この人にこう言われてみれば、なるほどその通りだという驚きと納得があつたとき、僕たちは文章の力に打たれるのである。そうでなければ、文章を読むとは、一体何なのか？

たとえ不十分であつたとしても、それが感じられない文章を僕たちは「その人の文章」だと感じることはできない。だから心つかまれないのだ。

ところで、この「その人の文章」。書く方の立場から言えば「自分の文章」。この「自分の文章」というのが、僕は随分長い間よく分かんなくなつた。

小学校のときからよく、「自分の言葉で言いなさい」と言われた。国語の時間でも、学級会でも、意見を求められて、「誰々君と同じです」というと、「自分の言葉で言いなさい」「自分の意見をいいなさい」と注意されるのだ。僕はこの「自分の言葉（意見）」というのがさっぱり分からなくなつた。どう考えても、先に発表した友達と同じ意見なのだ。たまたま自分と他人の意見が同じになり、たまたま自分が後で発表したというだけで、なぜそれは「僕の言葉」ではないのか。だいたい僕はみんなと同じ言葉を使い、まあそれなりに普通に生きてい

る。とびきり頭がいいなんてこともない。そんなに変わった言葉なんてそうそう出せる訳ない。「自分の言葉」って一体何なんだ？と思っていたのだ。

今考えると僕は、「自分の言葉」というものを、他の誰とも違った、自分にしか言えない言葉(意見)だと思っていたのだ。だからそれは、正しく、立派なものでなければならぬ。つまり見事に「正しいことを言わなくちゃ症候群(強迫観念)」に陥っていた訳だ。もちろん小学校の先生は、そんなものを要求していたのではない。自分で自分の考えを言葉にしようと努力しなさいといっていただけだ。

どんな事であつても、たとえ誰かと同じであつても、一端は、自分の感覚、経験を含めた、自分自身に引きつけて、自分自身の感覚に直接問いかけてゆく中で言葉を紡ぎ出してゆきなさい。そのとき、その考えは自分の意見となり、その言葉は、自分の言葉となるんですよ。言葉というものはそのように使うものですよ。小学校の先生は僕にそう教えてくれたのである。

もちろん「自分の文章」を書くのは難しい。起承転結だとか何とかといった、いわゆる「正しく」書くことより数倍も難しい。でも数倍楽しいのだ。この難しさと楽しさが文章表現の醍醐味なのである。

そして大切なのは、自分で諦めてしまえば、その可能性はほとんど全ての文章にあるのである。例えば次の例を見てみよう。

歩けば目に入る、ペットボトルやお菓子の包みが捨てられた道。こんな風景が私の周囲にはたくさん存在するが、悲しいこ

とにそれが当たり前と化しつつあるように私は思います。ゴミをゴミ箱へ捨てるなんて幼い時に習うことです。それを何故今出来ない人がいるのだろう。私はもつと「捨てる」という行為にこだわるべきだと思います。

では、そもそも「捨てる」とはどういうことなのだろうか。私は学校内で気になっていることがあります。それは、飲み物のパックが教室の机や廊下のちよつとした所に置いたままポイ捨てになっていることです。中身は空のようだが、誰が飲んだか分からない物なので片付けにくく、いつまでも置いてあることが多いです。つまり焼却されたりリサイクルされたりせず、いつまでもゴミのままなのです。考えてみればこれはゴミをゴミから抜け出せない状態のまま放置する行為なのです。だから、私はポイ捨ては「捨てた」ことにならないと思います。確かにその時持っていたゴミをすぐ自分の前から消すことはできるが、そうして捨てられたゴミがいつまでも残っているのです。自分の手元からゴミをなくすことではなく、ゴミとしてしかるべき処置がとられる場所、ゴミがゴミでなくなる場所へ持つていくことが「捨てる」ことだと、私は思います。

けれども、私たちがゴミを出さずに暮らすのは難しいことです。それ程ゴミは生活に密着した存在であつて、だからこそゴミを「捨てる」ことをいい加減に考えるべきではないと思います。ゴミに意志が無い以上、ゴミ箱の中のゴミも道端のゴミも、それを捨てた人の人間性を反映しているのです。ゴミを道端に捨てるのは自分の非常識をさらすようなもので、ポイ捨てをし

たそのときのいい加減な気持ちがいままで残り続けるのです。ゴミをただゴミと見ずに、こうして自分とつなげて考えてみる、とポイ捨ての恥ずかしさを実感できるでしょう。したがって、道端に落ちていたゴミは単なるゴミではなく、捨てた人の人間性なのです。道端に転がるような人間性は持ちたくないものです。

自分の感覚を手がかりに、どこかで必死に抗いながらも、結局一般論へ、一般論へ流されてゆく。僕にはこの文章がそう見える。でも確実に光ってる箇所があると思う。例えば第一段落の最後、「私はもつと『捨てる』という行為にこだわらざるべきだと思えます」という一文。これが、その直後の問を生み、「捨てる」という行為へのこだわりを可能にした。そしてそこからのゴミに対する視線。これらは、うまく展開できれば結構いけるんじゃないかと思うのだ。

例えば次のように書き出してみてもはどうだろう。きつと文章がのびのびしてくるはずだ。

「捨てる」とはどういうことか。私たちは毎日、たくさんのごみを捨てている。しかしそれは単に自分の目の前から消しているだけではないのか。それで本当に「捨てた」といえるのだろうか。私たちはもつと「捨てる」ということにこだわらざるべきだと思う。

こういう自分自身の感性をしつかり握って手放さなければ、この文

章は、まだまだ彼自身の文章へと成長できるはずだ。

しかし実際は、彼のように、抗いながらも結局、一般論へと流されてゆく文章が多い。それほど不安の声は根が深いのである。

・信頼ということ

バカにされるのがいやだからといって、不安の声に負けて、当たり前障りのない文章を書いたり、正論を一般論として書いたりしてはいけない。なぜかというところ、そういう文章をいくら書いても、「ああそうか、自分もやもやと感じていたことはこういうことだったのか!」とか、「自分が言いたかったことは、こういうえびつたりくる」という、一歩深いところで自分と出会うことはできない。そして、誰かに深く受け止められることはないの、一歩深いところで他者と出会うこともできない。だから、そんな文章を書いていても、ちつとも楽しくないはずだ。

では不安の声が聞こえてきたとき、どうしたらいいのか。答えは簡単。ただがんばって信頼することだ。何を? きちんと書けばきちんと受け取ってくれる人が必ずいるということ、である。

第六回「私がねじれるとき」で、この声が聞こえてきたとき、「少しの勇氣、ほんのちよつとの開き直り」があればいいと言った。この勇氣、開き直りとは、きちんと書けばきちんと受け取ってくれる人が必ずいるということに対する信頼のことである。自分と他者と言葉に対する信頼なのだ。この信頼があるからこそ不安にもなる。そしてこの不安があるからこそ、何度も何度も自分に問いかけ、文章を書き直すとうとするのである。できるだけ「うまく言えた」に近づける工夫を

するのだ。それでいいのだ。それしかない。

どんな大きな不安でも、その文章が誰かに深く受け止められたと信じられたとき、たとえそれが一瞬であったとしても、必ず消える。むしろ、不安が大きければ大きいほど、受け止められたときの嬉しさも大きい。臆病者流の文章表現が成功するかどうかは、このことが信じられるかどうかにかかっているといつてもいいのである。

もちろん僕は、このような言い方が、人間を、言葉を、文章を無批判に肯定していて、すごくお目出度く、甘く聞こえるのだろうかということを知っている。「あなたが言っている『自分』というのは、対象化されていない自己に過ぎない」と言われたこともある。しかし臆病者の流儀に従って言わせてもらえば、このことを否定して、一体文章を書くとは何なのか？ 自分の言いたいことを文章にしようとして不安になり、一所懸命書いた文章が授業で採り上げられてドキドキする。この事実を否定して、一体何が残るのか？

「表現法の試み」は、あくまで臆病者流の文章表現である。臆病者は臆病者らしく、無理に強くなろうとせず、文章を書くとき不安になり、授業で自分の文章が採り上げられてはドキドキし、他人のコメントに一喜一憂していればよいではないか。このことに含まれる難しさと楽しさこそが文章表現の醍醐味なのだから。

僕はこの不安とドキドキがある以上、文章表現の可能性は死んでいないし、そこからしか、文章を書くという行為は出発できないと信じているのである。

おわりに

今回は前回の最後に問題提起しておいた、不安の正体について考えた。これまででは、やや抽象的な考察と具体的なコツをあわせて一つの論考としてきたが、今回は、久しぶりの続編ということもあって、前者のみとなってしまった。しかし、そのことでもかえって、「表現法の試み」が、いかなる試みであるかを、改めて明らかに出来たように思う。

〔付録〕感想文集

・ 日本語法の授業はかなり楽しい。そう感じた。まず、他の人が書いたバラエティ豊かな作文が読める。これにはとてもワクワクした。他人の作文を読むなんて、中学校以来のことだ。(略)今日の授業は本当にドキドキした。まさか自分の作文について議論されるとは思わなかったからだ。作文を提出した後に自分のミスに気づき、「お願いだから読まないで」と祈っていたのに……。でも、自分の作文についてきちんと批評、議論してもらえてうれしかった。ちゃんとミスも指摘されたし。本当に参考になった。みなさん、ありがとう。毎回こんな感じで授業が進めばいいな。来週も楽しみだ。

・ 今回、自分の文章が読まれたのですが、とてもドキドキしました。一生懸命書いた文章だったので、誉められた時はうれしかったです。指摘された時は正直いい気持ちはしませんでした。しかし私はこれ

を望んで日本語法（C）を受講したわけであり、実際自分の文章のいい所、悪い所がはつきりと分かりました。

・ 今日2回目の文を読まれ、批評されたが、前回の文とは違い、今回は少し良い評価を受けた。やはり一回目の失敗をバネにして何時間も文を見直したかいがあつたと思つた。やはり苦労して書き上げた文章を他人にほめられると、本当に嬉しいのだという発見を今回の講義では感じる事ができた。開始当初の「適当に」という気持ちが変わつてきて、今ではよりよい文を書こうという気持ちになつてきている。

・ 日本語法の授業を通して、本当に文章に対する考え方が変わりました。それは読み手になつた場合、聞き手になつた場合の両方についてです。今までのいい加減な気持ちが全くなり、本当に文章を読み書き、聞きするのが好きになつたと思います。

・ 自分の文章、他人の文章に対して、文章の読み方、書き方が変わりました。ちゃんと考えるようになりました。その中でも、自分の感じたこと、書きたいことだけはきちんと書こうと、文書を練るようになりました。

・ 他人の文章を読み、みんなで議論していると、さまざまなのがわかる。その文章のいい点はどこか、あるいは逆にどこが悪いのか？ 文章を書くときに、本当に大事なポイントは何なのか？ そ

れらについて他の人と意見を交換し、発展させていくのは、本当に楽しい作業だ。議論することがこんなに楽しいことだつたなんて思ひもよらなかつた。

まず議論の内容が非常に濃い。文章の中身について遠慮のない深い意見をバシバシと言ひあい、お互いの考えを交換する。表面をなぞるだけではない、内容について深くツつこんだ議論を行うことができる。

議論の最後に語られる教官のコメントも実的確だ。さすが大学の教官だなと思う。高い授業料を払つて講義を受ける価値がある。

・ 最初のテーマについて、文章を書いて知つたのは、自分を照れずに表現する難しさだつた。自分の情けない文章を人に見せるのは、はずかしかつた。1回目の授業で他の学生の文章を見て、さらに自分の文章力が情けなかつた。

「ここを、こう読ませたいから、このように書いた」。ただ書くだけでなく、読み手に、自分を伝えようとする姿勢が他の学生にはあり、自分には全く無かつたように思う。

二つ目のテーマについて、書く時、長い時間をかけて書いたにもかかわらず納得できるものが書けなかつた。

三つ目のテーマは、自分の体験談を書いたので、内容について困ることは無かつたのだが、できるだけ、テンポよく書こうと心がけた。最後の課題について書く時、生まれて、はじめて楽しく文章を書けたと思う。

・この講義では「自分の文章を書き直したい」と思わせてくれる。即ち、自分の文章の悪い点が見えてくる。そんな感じがする。今まで、こんな気持ちになったことはなかった。作文が上手くなりたいたいと思つたことはあつたが、「一回でうまく書けるようになる」と思つてはいた。しかし「修正できる」方が重要であると思つた。

・今日の講義では僕が書いた「日本語法を受講した理由」が読まれた。正直ここまでよく評を受けると予想もしていませんでした。他人に読まれている間、自分の間違いを発見すると恥ずかしくしてしまうがありませんでした。しかも意見されたことは「確かにその通りだ」と納得のいくものばかりでした。

今では自分の書いた文を破り捨てたい気持ちでいっぱいです。しかし、それは他人に指摘されなければ生まれない気持ちだと思いません。

・文を作るとは難しい。けれど楽しい。前回の授業でそれを再確認することができました。(略)僕は自分の思っていることを相手に伝えるのがどうにも苦手なところがあつて、それは口で伝えるのも、感想文で伝えるのも、同じであつて、でも、脳裏にわだかまっているモヤモヤとしたものをなんとか表現したくてよく文を書きます。だから感想文で頭をかかえて、課題でワクワクしてたりします。それっておかしなことでしょうか？

・この講義を通じ、一つのテーマについて、いろいろな見方が出来る

ことを知つたし、様々な良い書き方というのが少しでも分かつた気がする。自分で文を書き、一日後にまた見て書き直す。さらに生活をしている中で何か面白いフレーズが浮かんで来ては「しめた！」と思ひ、さらに手直しする。そういつたことが楽しかった。人の文に対する意見を聞き、自分の文の至らないところを知り、恥ずかしくなることもあつた。先生の話に強く反発することもあつた。そういうことをもつと言葉にできたら良かったと思う。

(注1) 「人間関係をつくる自己表現——表現法の試み(二)——」(秋田経済法科大学短期大学部「論叢」第六十号 平成九年十一月一日)。「国文学年次別論文集 国文学一般 平成九年」(学術文献刊行会 朋文出版 平成十一年四月)に再録。

「自分を開く文章表現——表現法の試み(二)——」(秋田経済法科大学短期大学部「論叢」第六十一号 平成十年三月一日)。「国文学年次別論文集 国文学一般 平成十年」(学術文献刊行会 朋文出版 平成十二年四月)に再録。

「自分を生かす文章表現——表現法の試み(三)——」(秋田経済法科大学短期大学部「論叢」第六十四号 平成十一年十一月一日)。「国文学年次別論文集 国文学一般 平成十一年」(学術文献刊行会 朋文出版 平成十三年四月)に再録。

(注2) これは加藤典洋『言語表現法講義』(岩波書店 平成八年)から示唆をうけたものである。

The Pleasure of Expression 4

Yasuyuki Nakamori

I wrote three essays named The Pleasure of Expression from 1977 to 1999. This following essay is a sequel to those previous ones. Students have lost confidence in writing compositions because they no longer understand what it means to complete such a task. I would like to make clear what it means to write a composition. I think that there are two basic goals for one to achieve in writing compositions. One is to be able to present your own ideas and feelings clearly for yourself. The other is to be able to convey your thoughts so others will deeply understand your message. Being able to express difficult and complex feelings in terms that other people can understand is what makes writing a composition both difficult and enjoyable as well as making it a powerful exercise in which to engage. It is this true meaning and pleasure gained through writing compositions that I wish to share with others.